

伊藤実歩子編著

『変動する総合・探究学習

——欧米と日本 歴史と現在』

大修館書店 2023年 初版 223頁 2,200円(税別)

田中孝平(京都大学大学院)

本書は、『変動する大学入試』から構想を得て、続編として出版されたものである。本書は、日本と欧米における総合・探究学習の展開について、歴史的視点から考察する第Ⅰ部と、理論的・実践的視点から分析する第Ⅱ部で構成される。これらの検討を通じて、日本の総合・探究学習を取り巻く現状や課題を相対化することが目的とされる。

まず、第Ⅰ部に先立ち、序章では1980年代から現在までの学習指導要領の変化の過程が概説され、「総合」をめぐる分析視点として、「取り組むテーマ」「育成される能力」「カリキュラム編成」という3つの視点が挙げられている。

次に、第Ⅰ部では、アメリカ、ドイツ、日本の総合・探究学習の歴史が述べられる。第1章では、総合学習の源流としてしばしば参照される「プロジェクト」という概念がアメリカのどのような文脈や背景によって生み出されたのか、そして続く第2章では、同年代の新教育運動として注目を集めたドイツの合科教授の内実が、オットー(Berthold Otto)が提案した理論と具体的な実践記録に基づいて生き生きと描き出されている。また、第3章では、日本の総合学習の歴史に関して、戦前の総合学習の歴史については、「合科・総合の系譜」と「生活綴方の系譜」という2つの系譜で整理され、戦後から1970年代までについては、総合学習の位置づけとして「視点なのか領域なのか」という論点が提示されている。

さらに、第Ⅱ部では、7カ国の総合・探究学習の現在が取り上げられるが、大きく3つのパートに分けて構成される。第1のパートでは、教科横断的あるいは合科に関する初等教育の事例が取り上げられる。具体的には、オランダのイエナプランにおけるワールドオリエンテー

ションの事例(第4章)と、オーストリアでの事実教授における社会科学分野と自然科学分野の事例(第5章)である。

第2のパートでは、中等教育の事例として3つの事例が扱われている。具体的には、教科の枠組みを超えた事例である教科「労働」をめぐるイタリアの事例(第6章)、サービス・ラーニングに着目したアメリカの事例(第7章)、高校教育の集大成のプロジェクトとなる「高校活動」と呼ばれるスウェーデンの事例(第8章)である。

第3のパートとしては、後期中等教育修了資格試験における探究学習が取り上げられる。具体的には、GCE-Aレベルに新たに加えられたEPQ(Extended Project Qualification)に関するイギリスの事例(第9章)と、南オーストラリア州中等教育修了資格(South Australian Certificate of Education:SACE)の中で設定される学際的な科目に関するオーストラリアの事例(第10章)である。

この他に、フランスのバカロレア試験で必修とされ、総合学習としての性質をもつ「哲学」の事例についても紹介されている(第11章)。

本書では、全11章に及ぶ日本と欧米における総合・探究学習の歴史と現在を紡ぎ合わせることによって、現在の探究学習の特質を俯瞰する視点を得ることができる。とりわけ、探究学習が高大接続の議論と結びつきながら展開する中で、「探究の道具化・形式化」が一部の高校で進行している日本において、「誰にとっての、何のための探究なのか」という問いを改めて考えさせるヒントが随所にみられる。

本書には、序章に対応する終章は存在しない。言い換えれば、終章の創造は、読者である私たちに委ねられたというメッセージとして受け止めることができるだろう。私は、上述の通り「探究の道具化・形式化」という論点を再確認し、探究のカリキュラム編成を問い直す手がかりを得た。11章にわたる豊富な分析によって、序章で提示された3つの分析視点がいかにして拡張され、またその拡張はどんな新たな実践の構築を可能にするのか、オリジナルな「終章」を創造することを意図しながら読み進めてもらいたい。